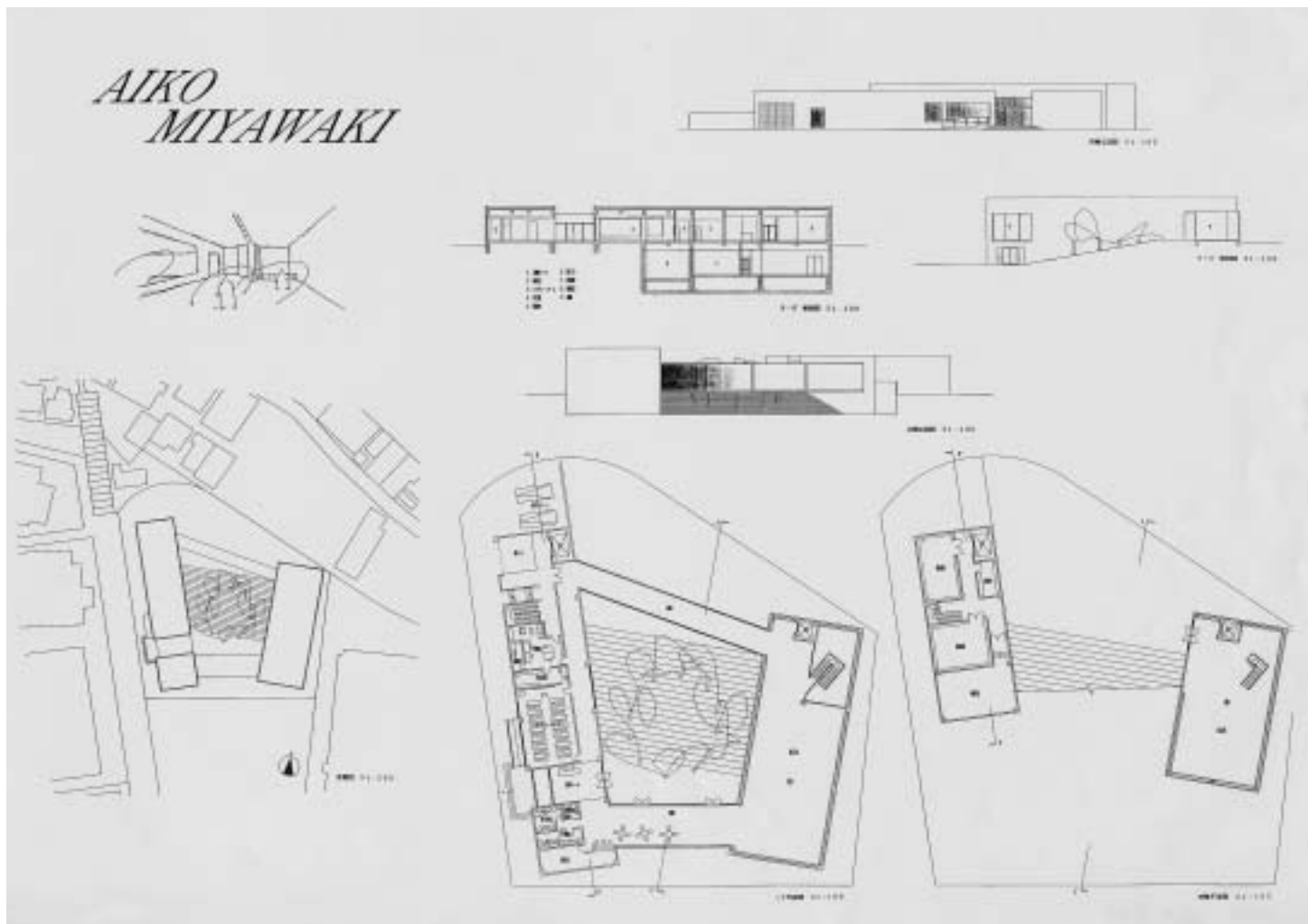


石井 秀明



建築設計製図Ⅱ

第2課題 個人記念ギャラリー

2年2組

担当＝

本杉 省三

宇杉 和夫

高宮 真介

飯塚 章

野沢 正光

橋本 功

吉井 信幸

26

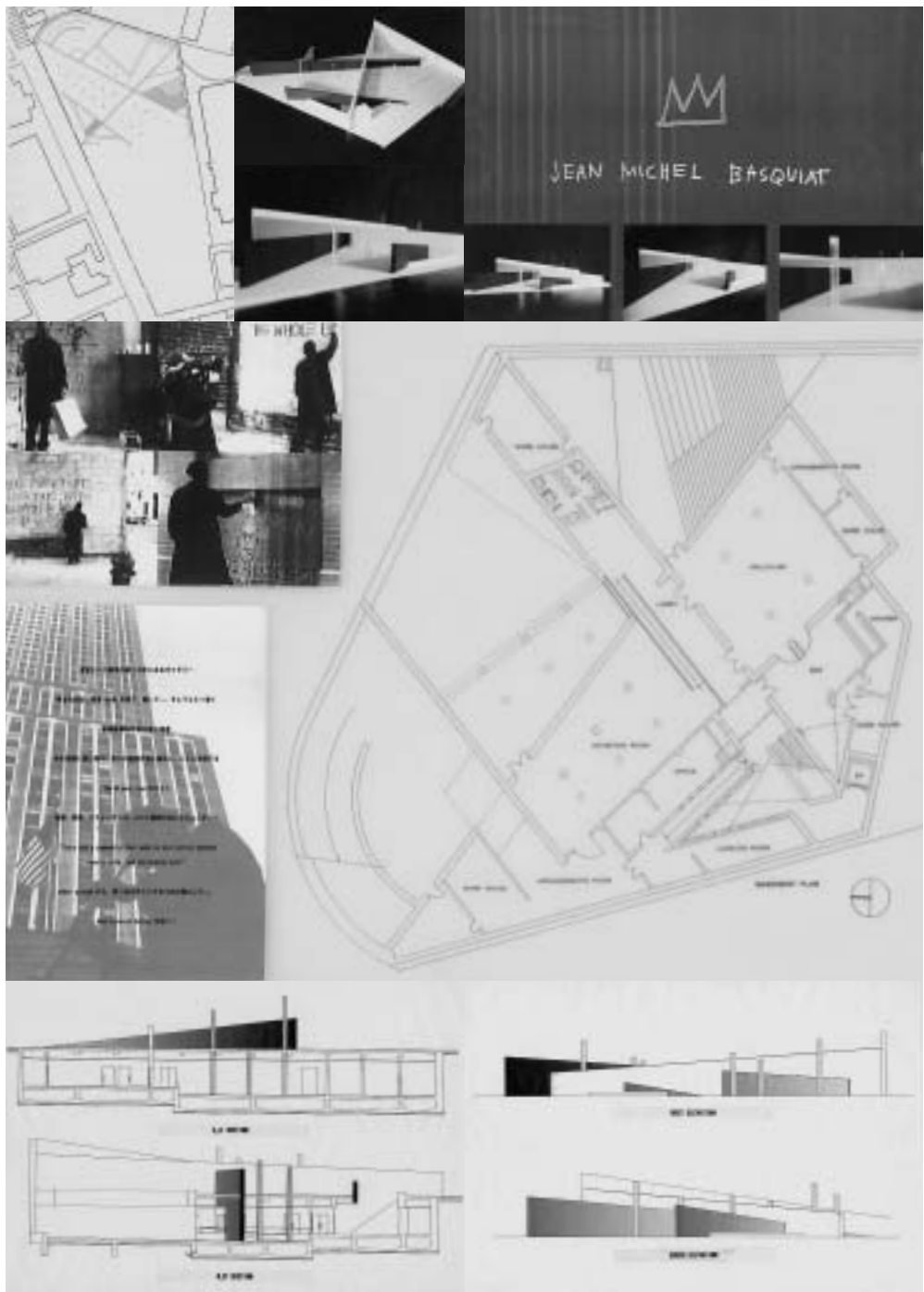
く、それだけではない空間の広がりというものを感じさせる作品である。その「うつろひ」と建物の空間とのつながりが重要だと考え、その結果、コンクリートの2つの箱をガラスの箱でつなぎ、中心に「うつろひ」を設けることにした。こうすることによって建築と作品が一体になるギャラリーとなり、宮脇愛子の言う“あらぬもの”を発見できる空間ができるのではないかと考えた。

指導＝高宮 真介

個人記念ギャラリーは、その作品と空間の対話が設計上重要なポイントになる。その対話をとおして、記念する個人の人と

石井 秀明

宮脇愛子の彫刻「うつろひ」は単なる線の構成というのではな



黒川 泰孝

りが浮かび上がるような建築ができれば、いちばん望ましいのだと思う。石井君が設定した作家は宮脇愛子で、作品は「うつろひ」である。この敷地の高低差を取り込んだ階段状の中庭は、菊坂方向に下がっていて、その両サイドは建物の壁面で領域が規定されている。この壁面に直交する形で、二つのブリッジが中庭の上端と下端に設けられている。そのようなハードコートに「うつろひ」が設けられる。春日通りから一歩入ったこの界隈は、事務所と古い町並みが混在しているところだが、周囲の喧騒から区切られた静謐な空間と、光と風にうつろう立体との対話がこの建築を豊かなも

のにしている。建築は少々硬いが、そんな対話から宮脇愛子の「あらぬもの」を見ようとする作者の意図が感じられて好感もてる。また2年後期の設計課題でも、なかなか自分が作っている建物を図面としてきちんと表現できない人が多い中で、平面や断面がよくかけている作品であった。

黒川 泰孝

東京という都市の真っ只中にあるギャラリー／来るものは、東京（社会）を見て、感じて……そしてここへ着く／多種多様な社会を含む東京／今を敏感に感じ取り、自らの表現方法に還元

し、ここに表現する／'70sのdown townのごとく／音楽、芸術、パフォーマンス、etcに境界のないコミュニティ／"There was a community that made no distinction between music, arts, and performing arts"／under ground から、世へ出るチャンスをつかむ場として……／Undiscovered Genius を世へ！

指導＝宇杉 和夫

私の班では展示空間の設計・建築の設計を特に意識させない。作家のもつ空間・作品の空間を考えることから出発している。そして多くの人が、そのアプローチを作品としてなんとかまと

めることに成功したように思える。横尾忠則（川井）／ジミヘン（川良）／モンク（小泉）／N・ロックウェル（後藤）／賢治（川村）／波山（金子）／野村仁（小林）／ブライアン・クラーク（小原）などなど。その他にも殆どが興味深い作品として並んだ。発表したのは小林哲也君・小原太一君・黒川泰孝君。完成度からみれば小原君の「スタンドグラスの光」と黒川君の「バスキア」が優れていた。バスキアは自己のまわりに絵を描く。NYの地下鉄に描かれた文字・記号が含まれたグラフィティ。しかしそこからアートに至ったヘリングとは異なる。そこに留まっている。そこに近づ

いたウォーホールとも異なる。黒川君はこれを地下から地上に現れた交差する白と黒の壁にまとめた。人類の誇りと希望を象徴するブラックとホワイト。そして悲しみも。内部空間はアンダーグラウンド。音楽とグラフィティ。パフォーマンスとソウルの混成。モダンとビートのやや古典化した対立の構図にも見えるが、ずれた幾つかの壁からなる白と黒の空間は象徴的で迷路の魅力ももっている。キング牧師の死以後1つの理想が崩れた。以後弾き出された言葉と音とらくがきの浮遊が続いているが、バスキアの絵には古い文化の記憶からのメッセージも伝わっている。